

特集：青 楓 寮

青楓寮と私達—1947年～1949年

菅 沼 和 恵

私達が入寮したのは、1947（昭和22）年敗戦後間もない頃で、アメリカ軍兵士が進駐しておりました。そこここに戦災の爪跡が残っており、食料や物資が乏しい時でした。

4月、東洋英和女学院保育専攻部に入学の許可を頂き、早速入寮する事になりました。「東京都港区麻布東鳥居坂2番地青楓寮」の荷札をつけて大きな荷物を出した事を懐しく思い出します。

同じ敷地内には、鳥居坂通りに面して、東洋英和幼稚園、その次にカナダ合同教会婦人ミッションの宣教師館があり、一番奥に青楓寮の4階建てのシックな建物がありました。1階、2階は青楓寮、3階は保育専攻部の教員室、教室、チャペル、4階には合同教室とピアノ室があり、1部屋に1台ずつのピアノが置かれていました。

毎朝のように竹芝の船の汽笛が聞こえ、屋上からは、富士山がよく見えました。夕暮れ近い頃、よくピアノ室へ行きました。私には特別の思いがあったのです。一番奥にある年代ものらしい、彫りのあるピアノに触る事でした。ピンピンと他のピアノと違った懐かしい音。いつ頃、どんな方が弾いていたのでしょうか。あのピアノは、その後どんな運命を辿ったのでしょうか。

寮には、4人部屋、3人部屋、2人部屋があ

り、私達のクラス29名中、11名が寮生で、女学科生も御一緒でした。

寮から一步外へ出て六本木を見ると、空地には真黒焦げの電柱が転がっており、交差点の角に一軒だけ、誠志堂書店がバラックの建物で営業、ゴトウの花屋は米軍将校達の花籠を求める車で賑っておりました。隣の店には仏花など地味な花が置いてあり、奥には甘味処がありました。

溜池の方へ目を移すと都電が新橋方面へ曲がるのが見え、方向を転じて見れば、霊南坂教会がそそり立っていて、私達は勇気づけられたものでした。そのほかは殆どがトタン屋根のバラックで、今の街並みからは想像も出来ません。そのバラック小屋の店先には一皿10円で2切のさつま芋、りんごは1個10円で木箱の上に並べて売られておりました。私たちは小遣いを出し合ってそれを買分け合い、空腹を満たしたのでした。

寮 監

私共が入寮した時、寮監は小泉登志先生でした。食堂は応接間とスライドドアで仕切られていました。いよいよ夕食の始まりです。新入生の紹介、食前のお祈りが終ると寮監の小泉先生が「皆、よく聞いて頂戴、ここにあるおかずと御飯を代わる代わる上手に食べないと片方が先になくなるのよ」とおっしゃったのが、今も聞こえる様です。因みに皿の上には、薄くて大きめの「はんぺん」が、つけ焼風にのっけていて横に何かの野菜とお汁と漬物だったと思います。



小泉先生が一学期でお辞めになり、9月には青山学院女子寮の寮監の川尻知恵先生が、青山学院の女子学生と御一緒にお出でになり寮監の責任をとって下さいました。副寮監の鎌倉ヒルダさん、山崎まつのさんが、川尻先生を助けて下さいました。

食事の配膳、片付けなどは、私達寮生の当番制で“おてつ”とっておりました。

### 食料事情

当時は食料難だったので、院長の長野彌先生ご自身が女学科の校庭の片隅を耕し、寮生たちのために畑を作って下さいました。

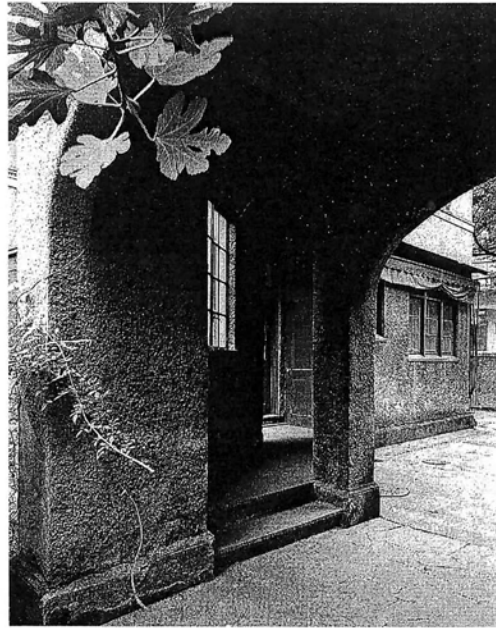
また秋には、授業が終ると私達はリュックを背負って、長野院長先生を先頭に、花小金井の農園へさつま芋の収穫に出掛けました。鎌倉ヒルダさんが附添って下さった事もあり、夕暮れの道を讃美歌を歌いながら、又、拓殖大の生徒達にひやかされたり、満員電車の中で押しつぶされそうになって悲鳴を上げた事も、懐かしく思い出されます。青楓寮に着くと私達はすぐ洗濯場へ行って、リュックから出したさつま芋をゴシゴシ洗いました。今夜の食事のためです。みんな、お腹を空かせて待っていたのです。さつま芋は、私達の大切な食べ物でした。

夕食の後片付けを済ませた私達に、先生は台所の大きな鉄のお釜の底に溜った、さつま芋の飴状のもの、まさしく“芋の飴”を振る舞って下さいました。一同大喜びで口に入れました。その後、夕拝のためチャペルに向うその時、互いに顔を見合せ驚きの声。「お歯黒だ」。さつま芋の飴のあくで歯は真黒。でも飢えていた私達には「いも飴」は、まさしく「救いの飴」だったのです。

朝食はパンでした。そのパンは(+・-)の電極版で焼いてあった時もありました。或る時はさつま芋だけ、ある時はグリーンピースだけでした。朝食後、暫くするとお腹が空き、折角作って頂いたお弁当に箸をつけること、しばしばでした。この早弁は流行しました。え!!そのリーダーはどなたですか? それは、もう忘却の彼方でございます。

### 朝食とビタミン剤

食事当番の時、錠でビタミン剤の入った透明の袋を切って、ビタミン剤を一粒ずつ黒いお膳に配りました。宣教師の先生方が、私達の健康を心配して下さいました。大きな、「ONE DAY」



と書いてあるブルーの缶に入った赤くて丸い錠剤でした。今考えると、総合ビタミン剤だったと思います。2年間、誰も病気をしなかったのは、宣教師の先生方の温かい思い、私達寮生のことを気遣って下さったお陰だと思えます。いまでも「ONE DAY」に感謝しています。

### お風呂

#### 〈銭湯での出来事〉

その日、私達は教育実習を終え、私はSさんと一緒に「狸穴」の銭湯へ行きました。

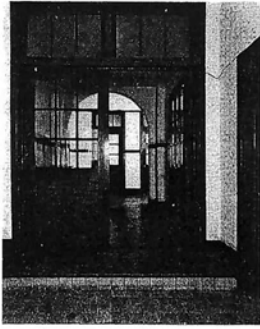
私は一張羅の「紺サージ」のスーツのまま、手拭をぶらさげて、鼻唄まじりに出掛けたまでは、よかったのですが!!

湯上がりの良い気分で衣類を入れた籠の場所へ行ってみると、なんと籠の中はスッ空かんである。下着もろとも盗まれたのだ!! 一瞬、目まいをもよおし、身体中から冷汗がだらだら流れた。寮の同室のSさんが、着替えを寮まで取りに行ってくれた。その間、裸の私は、銭湯の中の皆さんから注目の的だったろう。その後、どうやって寮に帰ったのか…。おそらく、あまりのショックの為に、記憶はさだかでは、ありません。

#### 〈狸風呂〉

青楓寮にはタイル張りの立派な浴室がありました。でも、使われておりませんでした。或る日、広い流し場に桧の楕円形のお風呂が置かれ、

試してみる事になりました。燃料は「おが屑」です。「取りに来るならお持ちなさい」という方があり、私達寮生は5～6人で、リヤカーを引いて取りに行きました。台所で使う廃材を含めて、沢山頂いたのはよかったです。ですが重くて、押しても引いても動きません。その家の小父さんか、行きずりの小父さんが見かねて一緒に引っ張って下さいました。“トウヨウエイワのためならば”と軍歌もどきの声を張り上げた小父さんの後から、皆でよいしょ、よいしょと掛け声をかけて寮まで運んで来たのでした。その折角の努力も、お風呂の煙突の調子が悪く、煙にいぶされて涙ポロポロ。「狸風呂」と言われ、いつしか中止になりました。



### 宣教師館でのお茶の会

生活の中で楽しみだった日がありました。月1回位だったでしょうか。宣教師の先生方が、私達寮生をお招き下さいました。私達は一寸、よそ行きに着替えて宣教師館へ。

ドアを開けるとコーヒーの香りがふわっとして、温かくそれだけで嬉しくなったものです。寮生は、家を離れて寂しいでしょうからとのご配慮だったのでしょうか。私達はそれぞれ、応接間の椅子、ソファに腰掛け、夕拝をし、先生方が運んで下さる紅茶、クッキー等を御馳走になりました。バット先生、ストーン先生もお運びして下さいました。

コーテス先生のピアノ演奏は“花の歌”でした。これは先生がお若い頃、お父様がお好きで、いつも弾いて差し上げていらした曲だったそうです。クック先生はピアノを弾きながらハーモニカを吹くという特技で“マーチ”などを聞かせてくださり、お見事で、私もあの様なをやってみたくと憧れました。

クリスマスの頃の御招待も嬉しい事でした。当時、バット先生はLARAの代表でいらっしゃいました。或る冬の寒い日にコートを着ていなかった寮生に目をとめ、LARA物資のオーバーコートはその寮生に、そして私たちにも下さったのでした。

ストーン先生は、農村伝道に貢献なさいまし

た。1954年（昭和29年9月）の台風で、青函連絡船の洞爺丸が遭難、その時、御自分の救命具を日本人青年にゆずられ、天に召されたのです。私共深い感銘を受けました。

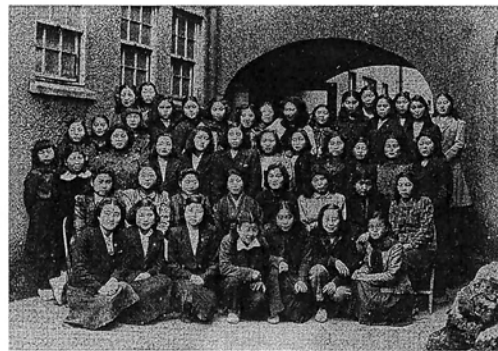
私達の女学生時代は大東亜戦争中で、勤労奉仕や学徒動員などで勉強の暇なく、またゆっくり友達と話す時もなく過しました。そんな私達にとって青楓寮での生活は、本当に貴重な二年間でした。

寮での生活には、山のように沢山の思い出があります。今となれば、みんな笑い話です。助け合い、分け合い、姉妹のように過し、深い友情で結ばれたのです。今も、寮生だけでなくクラスの方々とも手紙や電話で安否を確認し連絡をとって、クラス会には必ず出席しています。老境にある今、いぶし銀のような光を心に灯して頂いた幸せを、かみしめています。夜の礼拝では一日を静かに考える時が与えられ、翌日の糧になりました。そして、生涯の友に巡りあえた事を、感謝せずにはいられません。

困難な諸事情の中、寮監の川尻知恵先生のご苦勞は、如何ばかりであったかを思います。和服姿でお草履をお履きになっていらっしゃる穏やかな川尻先生、鎌倉ヒルダさん、山崎まつさんの心に心より感謝申し上げます。

1949年 保育専攻部卒 寮生11名
矢崎和可子 横屋 道子 高山 照子 藤原 良子
高橋 陽子 菅谷貴美子 門永 幸子 小島富美子
武藤 和子 松本 幸子 菅沼 和恵

㊦これは、それぞれの方から寄せられた思い出をまとめたものです。



1948年3月

# わが故郷の青楓寮—1976年～1980年

香川 朗子

六本木五丁目交差点と言えば、和菓子の老舗うぐいす餅の青野やロアビルのある賑やかな場所。そこから数メートル入ったところに“東洋英和女学院青楓寮”はありました。

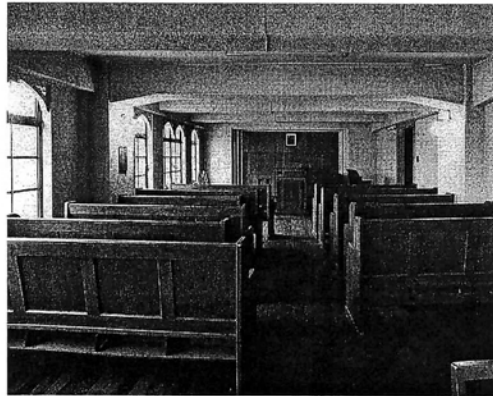
門を入り、木立の中を歩いて行くと、右手に二階建ての古びた洋館があり、東光会館として使われていました。もう少し奥へ進むと四階建ての同じ様な建物。それが、私が四年間（1976—1980年）お世話になった第二の故郷“青楓寮”でした。

その昔、宣教師が教鞭をとっていらした場所と伺っていましたが、木造モルタル造りというのでしょうか？当初はきれいなクリーム色かオフホワイト色だったかと思われませんが、私共が居りました三十年程前は、茶色がかって古びた様相になっていました。

玄関は大きな観音開きのすりガラスの入った木の扉で、一步入るとひんやりとした空気が流れ、天井が高く、床は落ち着いた茶色のフローリングでした。

## 部屋のこと

玄関はお客様と寮生との入り口は区別があり、正面には電話室とアイロン室。その部屋と玄関との間は、左右に長い廊下があり、右手廊下のつきあたりに食堂と台所。玄関の右横は山崎さ

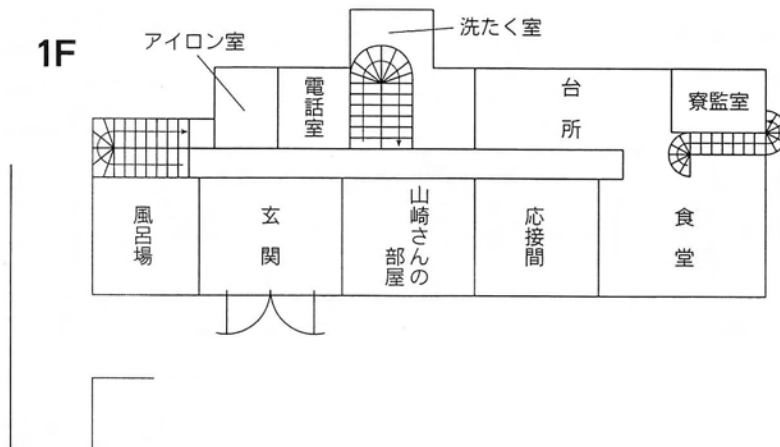


んの部屋、食堂より奥に寮監先生の部屋がありました。

玄関より左手には風呂場があり、階段は大小合わせて三ヶ所にありました。

二、三階は寮生の部屋となっていましたが、部屋の大きさはまちまちで中には壁に黒板の残っている部屋もありました。一人部屋は専攻科生優先。二人と三人の部屋には必ず上級生が一人入るのが決まりでした。暖房はスチーム。入寮してすぐに言われたのは、地震が来たらすぐに入り口のドアを開けることでした。

礼拝室は寮でのクリスマス会の時、短大の先生をお招きして礼拝を守る時に使われました。



談話室や屋上が、保育科のリトミックのおさらい場になったこともありました。

お風呂場の丁度真上は、洗面所とお手洗いなのですが、“おてこ”という可愛い呼び名が青楓寮流でした。その横に（二階か三階のどちらか）開かずの扉があり、網戸の向こうはうす暗く、うす気味悪い場所がありました。隣の建物への通路の名残らしいという話でした。

四階は屋内洗濯干し場とピアノ室、屋上への上り口になっていたと思います。そこには、アップライトのピアノが一台入る細長い部屋が四つ位あり、朝8時～夜8時利用できました。中には鍵盤が黄色く変色し、不思議な音のする古いピアノもありました。

上級生にクラシックもジャズもこなす上手な方がいらして、隣室でうっとり聞き惚れていたものです。日曜日の午前中は安息日ということで、ピアノと洗濯機の使用はできませんでした。

お風呂は月火木金のみで、その他は鳥居坂を下って、麻布十番の温泉に行くのですが、寮生が半纏など着て洗面器を持って歩くと、六本木へ向かうおしゃれな人達にジロジロみられたものでした。十番温泉はお湯が茶色で初めはびっくりしましたが、肌がツルツルして芯から温まりました。

マル秘で上級生から教わったのは“お散歩”。これは、夜中に電気をつけず、他の寮生にも気づかれない様に入浴することでした。お湯はぬるく、シャワーは水ですが、天窓から差し込むネオンが助けとなって真っ暗ではなく、とてもスリルのあるお散歩でした。四年間居た私ですら、お散歩は2、3回位だったでしょうか…!?

屋上からは、休日の空気の澄みきった折には富士山が臨め、癒しの、私のお気に入りのスポットでした。



#### 寮監先生と山崎さん

私が在籍した頃は、寮監は大迫清子先生、食事のお世話をして下さるのは、山崎マツノさんでした。お二人とも、いつも寮生のことをあたたかく見守ってくださいました。

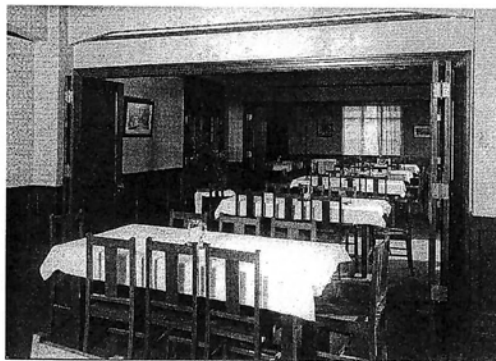
入寮して間もない頃、大迫先生に阿佐ヶ谷教会に連れて行って頂いたことがありました。また食事の片付けの後、布巾を何枚も熱い湯できれいに洗い、清潔を心がけていらしたお姿や門限近くになっても戻らない寮生を心配そうに待っていたお姿を思い出します。

山崎さんは、長年寮生の朝・夕の食事のみならず、保育科生の実習の折にはお弁当も作って下さいました。戦後、リヤカーで青山まで買い出しに行かれたとも聞きました。どうして寮の台所を預かることになられたかは存じません。とても小柄な方でしたが、寮のために尽くされた業の大きさは計り知れず、言葉では言い尽くせぬ思いでいっぱいです。

朝食はゆで卵にハム、コールスローサラダ、食パン、炒めごはん、紅茶、牛乳が定番で、少し固くなったパンで作るフレンチトーストは、ここで憶えた気がします。

クリスマスには鶏ももソテーや焼きリンゴの御馳走で、短大の先生方も御一緒しました。その後の余興も張り切ったものでした。

閉寮後、大迫先生は他校の寮母に就かれ、山崎さんは郷里の香川県琴平町に帰られました。その後も山崎さんとは、年賀状の御挨拶は欠かさずしておりましたが、ある日、平成11年7月27日、享年84才にて他界との知らせが届きました。今思えば、何十人もの若い女の子達を預かる寮監先生と山崎さんの御心痛はいかばかりだったでしょう。本当にお世話になりありがとうございました。山崎さんには改めて御冥福をお祈り申し上げます。



## 寮生活のこと

“カントクさん”という呼び名の、一日をとりしきる当番があり、朝の掃除や、朝・夕の“おてつ”と“お洗い”の点呼。朝食前に歌う讚美歌選択とお祈り。夜の自習時間の電話番の役目がありました。（“おてつ”は食事の準備の手伝い。“お洗い”は片付けのこと。）

門限は午後10時で、消灯後、大迫先生と山崎さんの見廻りがありました。

寮生は40～50人で、高校生が一緒だったこともあります。専攻科生の中には、午前中幼稚園で仕事をし、午後から授業に出る方、再度勉強を希望された年配の方、ドイツ留学を目指していた方など様々でした。

英文科と保育科、専攻科が入り交じって部屋を行き来し、良い刺激を沢山いただきました。

## おわりに

賑やかだった寮も閉寮前は十数名だったと思われまます。

寮生活はまさに青春そのものでした。上級生を敬い、仲間との協力。様々な人との出会い。自由と責任の中で過ごした毎日。夢や嬉しいこと、悲しいことを語り合い、分かち合い、人としての学びを深めていったこと。これらは私にとってかけがえのない宝です。

そして何よりも、“敬神”“奉仕”の精神が自然にはぐくまれた日々であったと感じます。

友人が当時、今の私共と同年令の御婦人方が



1978年 春 お別れ会

寮を訪ねていらして、「懐かしいわねえ～」とおっしゃっていたのを目にしたそうです。

学生達は卒業して閉寮を迎えても、夢に向かって走り出していましたから、寮に対してしみみりとした思いはあまりなかったかもしれません。

今回、原稿の依頼があつて記憶をたどるうち、大迫先生、山崎さん、短大の先生方、職員の方々、地域の方々・・・と多くの方々に支えられていたことを改めて感じ、合わせて感謝と御礼を心より申し上げます。

そして寮生名簿を作成し、近い将来、「懐かしいわねえ～!!」と再び集い、未完成の寮図を完成させたいと願っているところです。

1978年 短大保育科卒  
1980年 保育専攻科卒  
元東洋英和幼稚園教諭 旧姓田原



## 〈資料紹介〉14 「青楓寮」

堤 加寿美

1932年六本木、カナダ合同ミッションにより建てられた東洋英和の学生寮である青楓寮。

この本は1980年3月に惜しまれながらも閉寮となったその青楓寮の歴史と思い出を、東洋英和女学院青楓寮編集会によりまとめられ1982年に発行されたものである。

上海事変に始まり、太平洋戦争とその敗戦、戦後日本の復興、東京オリンピックと高度成長という、歴史的にも激動の昭和の約50年間という時代に青楓寮はあり続けた。

寮生活が各々の時代の影響を受け変化していった様子や、親元から離れて暮らす寮生と、それを大家族の一員として温かく迎え生活を共にしていった寮に関わる人々の心のふれあいが伝わってくる貴重な記録である。

### 先生のあし音

この章では、院長であられた長野彌先生、光明照子先生、寮監の児玉静枝先生、平岩絢先生、小泉登志先生、大迫清子先生、保健の坂田はま先生、調理の山崎マツノさんなど、寮に関わってくださった先生方の思い出が語られている。

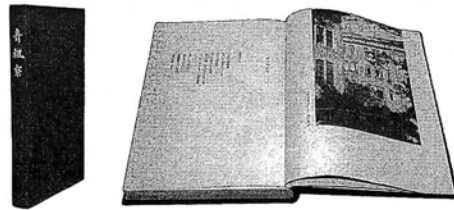
長野先生は戦時中寮生と一緒に花小金井の畑まで芋などを買出しに行ったことや、寮生が炊えのために元気がなく気分が荒れてきたので、音楽の先生に楽しい歌やゲームのご指導をお願いし、気分転換をはかるようにご配慮なされたことなどが語られる。

山崎マツノさんは30年余にわたり食べ盛りの寮生がいかに美味しく食事ができるかに心を配り続ける。戦後まもなくお湯を沸かすにも人手も物資も不足で、寮生たちがリヤカーをひいて麻布十番まで木屑をとりに行くこともあったが、「苦労を苦労と思わず不平不満ひとつ言わずに夜道を讃美歌を歌いながら帰る姿に、私は涙がでました。」と山崎さんは回想する。

### わたしの春

この章では93名の寮生の思い出が語られる。…入寮一期生の年代の方は、夕方に屋敷町のガス灯のあかりを灯すガスマンに美味しいお店の情報をもらったり、屋上で富士山を見ながら讃美歌を歌ったこと、週一回西洋さん（宣教師の先生方）と一緒にいただく洋食フルコースの思い出などを語る。

…規則の厳しい寮にあっても、消灯時間に見回



りにくる寮監に「おやすみあそばせ、4人でございます。」と室長が部屋の人数を伝えるが、部屋の入り口に毛布をつるし押入れの中で懐中電灯で勉強したり怪談話で盛り上がった様子など当時の楽しい話も語られている。

…戦時中は暖房スチームのラジエーターを軍部に供出したため、食堂に火鉢がひとつだけという厳しい環境にあったが、この暖房も給湯もない寒さにあっても「冬の冷たい水でごしごしの洗濯や拭き掃除、当番の食器洗いなど讃美歌を歌い、お喋りや冗談を言い合って片付けた。」と当時を思い出して語る。

### 寮生活の移り変わり

寮監の年代ごとの表から、寮費、一日の時間割、食事、風呂など、それぞれの時代の寮生活の様子を詳しく知ることができる。

クリスマス、歓送迎会、ハロウィーンなど、様々な行事も先生方と楽しんでた。

いつの時代も厳しい寮の規則の中にあっても、ささやかに規則を破るスリルを楽しみ、お腹が空いても笑いの絶えない様々な人々との豊かな心のふれあいがあり、共に喜び共に悲しみを支え合い励まし協力する寮の人々の姿がそこにはあった。

そのほかにもこの本には「歴代寮生の方々の座談会」、「各時代の六本木の地図」なども数多く掲載されており、昭和という時代に六本木に在った青楓寮を取り巻く思い出とその時代の変化を見ることができる。

戦時中寮生であった植村さんはいみじくもこう語っている。

「とにかく青楓寮は神を敬い人に仕えるという英和の教えを生活の中で、実際におこなった所だと思うのです。」と。

(幼稚園教諭 史料室委員)

## 加茂先生のこと

岡本 幸江

その頃「加茂先生は？」と言えば、「太った先生」と生徒の誰でもが答えた。確かに、普通の人の倍はおありになった。丸い金縁眼鏡に黒い大きな<sup>ひげ</sup>髭、地味な縞のお着物と黒い羽織を召していっしょだった。授業はなさらないけれども寄宿舎の舎監で、なんだか偉い先生らしい、という感じだった。

昭和4年、1929年、姉が英和に入学したので私は小学部五年に転校させられたのだが、間もなく父は関西方面に転勤になってしまった。それで家族会議の結果二人は寄宿舎に預かっていたことになったのだった。

母に連れられて初めて御挨拶した加茂先生はにこにこして、「可愛がってあげますよ」と言って下さった。先生は畳の上に籐の肘掛け椅子を置いて腰かけていっしょだった。

当時の校舎は明治33年落成41年増築「目でみる英和の110年」に大きく紹介されている、木造三階一部四階建ての美しい立派な建物である。寄宿舎はその二階と三階にあった。小学部の教室はその一階にあり、女学校の教室はもっと向う側にあった。門からスロープを下って玄関を入るとすぐ応接間があって、男性は父親でもその先に入ることは出来なかった。

寄宿生は師範科（後の保育科）の生徒が大部分、先生方も何人か、看護婦さんが一人、それに事情により預かった女学生、小学生が数人、かなりの大世帯であった。加茂先生のお部屋は二階、私達は三階の鶴田先生（後の新井竹先生）のお部屋に入れていただいた。壁を隔てた畳の間が並ぶ長い廊下は何故か上下に波打っていて、一方のつき当りにお作法室があった。反対側の階段の先に理科室があって、夜の勉強時には皆そこへ行くことになっていた。

食堂は一階にあった。皆が集まると加茂先生はチリリンとベルを振り、誰かがお祈りをした。食事中はおおむね静かで、終ると先生は何かお話しになった。報告とか御注意とか、ゆっくり

と、はっきりと、遊ばせ言葉気味で。先生方も含めて皆、加茂先生には叛かないんだと、私は子供心に感じていた。先生は肉がお嫌いで、主菜はお魚だった。一度肉が出た時、大貫廣先生（酒井先生）が「先生、珍しいです」と仰言ったの



で、加茂先生にこんな口が利けるのは大貫先生だけなんだ、と思ったものだ。

五十年史によれば、加茂先生は明治27年なんと日清戦争の始まった年に24才で英和に着任、29年に舎監に就任、関東大震災の時には不穏な噂も日々エスカレートする戒厳令下、僅かな使用人と寄宿舎をお守りになった、このことは先生御自身の記述がある。<sup>(注)</sup>そして昭和4、5年以降は新校舎建築資金集めの為に東奔西走、寝食を忘れてのお働きで大きな成果をお挙げになった。

ほんとに偉い先生だったのである。

(1936年高等女学科卒 元 中高部教諭)

### 加茂礼子先生略歴

1871年 6月14日千葉県に生まれる  
1883年 公立北条小学校卒業  
1890年 渡邊裁縫女塾卒業  
1891年 靱繪小学校にて裁縫を教える  
(~1894年)  
1894年 東洋英和女学校 裁縫教師に就任  
1895年 同 寄宿舎舎監に就任 (~1936年)  
1948年 3月5日逝去 (享年76歳)

(注：次ページに加茂先生のエッセイを五十年史から抜粋してご紹介いたします)

## 〈参考資料—五十年史より抜粋〉

### 思ひ出の九月一日

加茂 令子

……進んで留守番を御引受けする様になつたのでした。大正十二年八月もかうして過ぎ……一度ロバートソン先生の御好物で日本の食事を差上様と御招きしたのが、九月一日のお晝食でした。折あしく來客にさまたげられ、用意にと立上つたのが十一時半、大七輪にカンカンおこした炭火で、今海老の天婦羅にとりかゝらうとした其の時でした。異様な大音響に魂をうばはれて立ちすくんだ瞬間、『先生地震です。大變です。』とて若い女中は馳せ來り私の手をとつて引ずる様に戸外に出ました。折も折くづれはじめた麻布教會の瓦が左肩にあたつてうちのめされ、立たうとしてはころび、ころんでは立ち、漸く體操場と賄の間をぬけて先づ安全地帯と目星をつけた山尾様の御庭へと、丈餘の土手をのぼりました。ふりかへればたつた今かけあがつたばかりの足もとの土手は、みるみる砂煙を上げてくづれはじめました。こゝまで引ずつて來てくれた少女の目には涙、私も一歩おそかつたらと思はずツツと致しました。『先生、大丈夫ですか—西洋の先生も御無事でした。』と、見舞つてくれる出入のペンキ屋の親切も一入身にしむことでした。氣懸りなのは二階でガラスをふいてゐた女中と、くづれ落ちた煙突の下で誰やら先まで編物をしてゐたといふ話、臺所の火も咄嗟に大藥罐をかけて來たとはいへ、傍には油もある事です。ペンキ屋が危険をおかして屋内に入り火の始末をし、皆無事でのがれた事を見届けて來てくれるまでは安心がゆきませんでした。



麻布森元町崩壊惨状 (写真提供：国立科学博物館)

餘震におびやかされながらも、先づ身邊の危険をのがれると、第一に頭に浮かぶのは食糧問題でございます。此の家族をどうして食べさせて行くか、第一に私の頭に浮びました。震へる大地と入道雲の様に湧き上る焔を見つめて。(中略)

例年ならば九月一日に買入れる筈であつた米、調味料をはじめ、副食物のいくらかをさへ、前以て大量にとゝのへてしまつたのでした。

先づ十日や二十日の食糧に事缺かぬ豊富な材料がとゝのつてゐたのは、偶然といふにはあまり幸福にすぎ、何か御導きのあつた事が信じられるのでございます。次に頭に浮かんだのは安政の地震にあつた祖母が、先づお米と蠟燭を用意せよと度々言うた事でした、こんな場合、早やどこも品ぎれで、漸く小使のえいさんが知合をたよつて、大森の方から求めて來てくれた百本ばかりの蠟燭が手に入りました。用意はよしとその夜は折よく修理の爲に手近にあつた二十三の蚊帳を出し、あるひは庭の木々の間につり、あるひはくるまつて漸く横になる事が出来ました。此の間にも餘震はひつきりなしに私共をおびやかして居りましたが、「主よ御心のまゝに」と折る時、不思議に平穩な氣分が底からわいて來るのでございました。(中略)

『加茂さん、よくたふれなかつた。私はまづ先にたふれたと思うた。』と見舞つて下さつた麻布中學の清水校長。つゞいて平岩先生の御令息も安否を御たづね下され、かうしておひおひに各方面の消息がはいるにつれ、豫想以上の災害に胸は痛むばかりでした。時折大音響とともにくづれ落ちる音、これはダイナマイトで下町方面のビルディングを爆破する爲ときゝました。水道のきれた都會の消防隊は、さしも周到な用意も何の甲斐なく、猛火のくるふにまかせるより他なかつたのでございます。話半分とはよく人のいふことでございますが、あの當時の出來ごとばかりは、其の十分の一を書き現すのも困難な事でございます。(中略)

漸く地震が下火になつて安堵する頃から、ポツポツ盛んになつて來たのは××さわぎ、根も

ないあの流言がどこまで当時の人の心をまどはせた事とせう。冷静さを失つた心のまよひ、當時をふりかへつたゞ笑つてしまへないものがございます。やれこつちの塀をのりこえた、それそつちの庭ににげこんだと人の走る音、ピストルの音、戒嚴令の布かれた町々は、全く殺氣だつて物騒な事御話しの他でした。夜など外出する人もなく、時折巡回のおまはりさんのサーベルの音、靴の音がコツコツカチリと不氣味にひびくばかり。(中略)

親類の書生が塀をのりこえて『世間はやかましくございます。今夜こそは。』と自動車をもつて迎へに参りました。私は自分一人難をさけてはすまぬ、それに大切な留守番役をしてゐるので、間違があつては申譯がたゝぬと、此の時も度々の親切を謝し、固く断りました。流言は益々甚しく、今夜にも萬歳を叫んで焼打にくるといふさわざ。其の時にはいさぎよく殺され様と自分は覺悟をして居るものゝ、四階にかくまつてくれ、避難民を收容しろと次々にやかましく申込まれるには、全く應待に骨ををりました。當時の牧師の御すゝめもあり、周囲の思惑も慮り、教室だけ開放して御用にたて様と決心するまでには、一夜考へぬきました。(中略)

十日には麻布區役所から三十三聯隊の本部を置かしてくれとの依頼、願つてもない事と、早速幼稚園に疊をしきつめ、御用にたてる事になりました。電話は引かれ、用意とゝのつて頼もしい兵士達を近く御迎へした時、張り切つた心は一時ゆるみ、十二日からは安々と深い眠りに入る事が出来ました。翌日は水道ももとの復し、電氣も通じ、全く百の目が一時にひらいた様な心地がしました。白ペンキで塗り上げたばかりの風呂場に、なみなみと湯をはつた浴槽、せめて十餘日不眠不休の兵士方をねぎらふためにとの心づかひは、非常な御満足を頂き、四十人の爲に用意した十個の石鹸は、僅か二三分の間に完全に泡と消えてしまひました。當時の愉快な記憶として今もありありと残つて居ります。(中略)

やがて校長が二十日に歸られるといふ情報がいりましたので、一日も早く開校の準備をするために、二十一日御立退き頂きました。此の時滞在中の心地よさをこぞつて喜んで行かれたのには、せめて御勞苦に對して幾分の謝意を現し得た事を知り、私も嬉しく感じました。

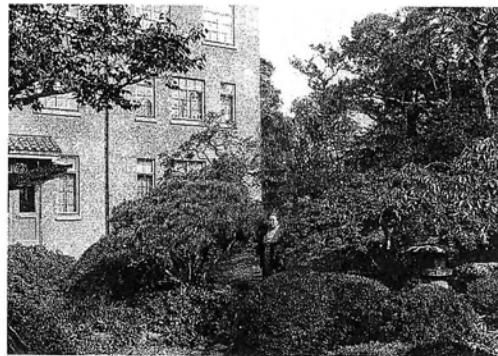
翌日からは、校舎の整理に大童の活動がはじ

められました。頼まうにも人なく、くづれかゝつた壁を落しては、六人の僕達が、掃く、拭く、はたく、何度も何度も繰り返しては、寸時の休みもありませんでした。私もまた七人の炊事を一人で引受けて小釜で一日に七度も御飯をたく有様でした。人間の力も氣の張りで、可成り無理のとほるものでございます。さしも荒れ損じた校舎寄宿舎も、兎に角十月一日の開校日まで形をとゝのへる事が出来ました。開校と同時に焼けた本所の中村女學校から、臨時の教室を借りたいと懇願され、午後の教室を御貸しする事になりました。津田塾から二十名、聖經女學校から二十名、これは寄宿舎の方を御貸しする事になり、其の混雜さ到底御話しになりませんでした。かねがね江原、清水兩先生が、古い木造であぶないあぶないと御注意されて居りましたが、ブラックモア先生があゝの寄宿舎をたてる時、二度風でたふれた御經驗で、要所要所に鐵棒とかすがいを入れてあるから大丈夫と、日頃いつて居られましたが、壁をいためたばかりで、他に大きい破損がなく、たゞ煙突のたふれた爲に屋根に穴があいただけだつたのは、そんな理由からだつたのでございませう。

ミス・ブラックモアは、あまり『有難う』とおつしやる方ではございませんでしたが、私の在職中四度其の御言葉を頂きました……、多数の寄宿生が下痢を起して、赤痢の疑のため十六の吊臺が門にならんだ時と、この地震の折。それらが先生の御意にかなつた金鷄勳章ものであつたのでございませうか……

あの大震災も、すぎて見れば尊い經驗の一つでした。

(注：文中、一部旧かなづかいを現かなづかいに改めました。)



青楓寮と加茂先生 (1932年)

「史料室だより」目次No.61～70

- No.61 (2003.11.6) 特集 東洋英和とメサイア  
 女声メサイア—福岡正男先生のお話  
 《クリスマス礼拝とメサイア》 酒井ふみよ  
 短期大学、大学のメサイア 飯島千雍子  
 メサイアをうたう会の活動を振り返って  
 (代表) 市橋佳子・大軒京子  
 〈思い出の先生がた〉 6  
 松本寛二先生との思い出 加藤 道夫  
 〈資料紹介〉 4 英語の校歌 古澤 育恵  
 新史料室紹介 谷川 祐子  
 史料室だより 目次No.51～No.60
- No.62 (2004.3.10)  
 夜間大学院の設置—社会に開かれた大学をめ  
 ざして 川島 貞雄  
 〈思い出の先生がた〉 7  
 井上健之助先生のこと 黒川 信也  
 〈資料紹介〉 5 定期刊行物  
 『敬和会』 陶山 義雄  
 『母の会だより』 酒井ふみよ  
 2003年度史料室報告
- No.63 (2004.11.6) 創立120周年記念号  
 村岡花子と東洋英和 村岡 恵理  
 〈思い出の先生がた〉 8  
 カートメル先生の思い出 原田知津子  
 〈資料紹介〉 6 村岡花子の本—翻訳・随筆  
 [絵本] 笹川 奈緒  
 [児童文学・小説] 叶田 光恵・大井みどり  
 [物語以外の翻訳] 坂井 知  
 [随筆] 古澤 育恵  
 村岡花子関係資料(1) 学院所蔵の図書
- No.64 (2005.3.30)  
 「120年史の編集」に携わって 新富 英雄  
 〈思い出の先生がた〉 9 短期大学最後の  
 学長としての福田垂穂先生 大嶋 恭二  
 〈資料紹介〉 7 年史(1)  
 『東洋英和女学校五十年史』 島 創平  
 村岡花子関係資料(2) 学院刊行物より  
 2004年度史料室報告
- No.65 (2005.11.15)  
 大正の頃の東洋英和—坂文子さんのお話  
 (文責) 保坂 綾子  
 〈思い出の先生がた〉 10  
 光明先生の思い出 遠藤 順子  
 〈資料紹介〉 8 年史(2)  
 『東洋英和女学院七十年誌』 島 創平  
 史料室報告 2005年3月～9月
- No.66 (2006.3.15)  
 ミス・ハミルトンと交換船 弘中真由美  
 〈思い出の先生がた〉 11  
 功刀嘉子先生の思い出 恒益 馨  
 〈資料紹介〉 9 年史(3)  
 『東洋英和女学院百年史』 島 創平  
 史料室活動報告 2005年10月～2006年2月
- No.67 (2006.11.30) 特集：片山廣子と東洋英和  
 東洋英和の宝“廣子とみね子” 与那覇恵子  
 東洋英和女学院所蔵「片山廣子氏寄贈本」  
 について 保坂 綾子  
 〈思い出の先生がた〉 12  
 MISS BLACKMORE AND ROGERS FAMILY  
 Daphne Rogers  
 〈資料紹介〉 10 片山廣子の本  
 『かなしき女王』・『カッパのクー』 東 夏子  
 『燈火節』・『野に住みて』 保坂 綾子  
 史料室活動報告 2006年3月～9月
- No.68 (2007.3.5) 特集：母の会(1)  
 東洋英和幼稚園母の会について 佐藤 奈緒  
 振り返って 長野美登里  
 大学付属かえで幼稚園父母の会活動について  
 森高ホサナ  
 母の会とわたし 木口 敬子  
 〈思い出の先生がた〉 13  
 安井てつ先生の思い出 岩原さかえ  
 〈資料紹介〉 11 母の会関係資料(1)  
 「小学部母の会収集資料」について 保坂 綾子  
 史料室活動報告 2006年10月～2007年1月
- No.69 (2007.11.20) 特集：母の会(2)  
 中高部母の会の思い出 牧野 安子  
 「マルタとマリアの会」の歩み 田口多佳子  
 〈思い出の先生がた〉 14 静かなる威厳—  
 樫村辨市先生の思い出 西野 和子  
 〈資料紹介〉 12 母の会関係資料(2)  
 一通の書簡が語る中高部母の会創立の逸話  
 水谷 悟  
 史料室活動報告 2007年2月～2007年9月
- No.70 (2008.3.14) 特集：東洋英和の運動会  
 二つの最後の全学院運動会 三谷 操  
 〈思い出の先生がた〉 15  
 秀村欣二先生の思い出 島 創平  
 〈資料紹介〉 13 運動会のプログラム  
 史料室の活動より(2007年10月～2008年2月)